

学 位 論 文 要 旨

氏 名 渡 邊 祐 三

題 目 独自性のある保育課程の編成と持続的学びを促す保育内容の実践

保育課程編成上、最初に重要になるのは、保育目標の設定の仕方である。次に、明確化した保育目標と、それを達成するための保育全体の理論的枠組みを、保育所保育指針の目標・ねらい・内容と関係づけたり、整合したりすることによって、各園の保育の蓄積を活かした一貫性及び体系性のある保育課程を編成することができる。そのことができてはじめて所属保育者は、保育への自信と集団効力感を持ち、保育実践に臨むことができる。

また、2008年の『保育所保育指針』の改定により、各園はこれまで以上に保育の目標・全体計画を明確にして、その計画に基づき、実践を展開し、評価・改善することが求められている。そこで、本論では、園で独自に編成した保育課程に基づきながら、より広範囲に適応出来る汎用性の高い保育実践の開発を通して、独自性のある保育課程と、持続的学びを促す保育内容の実践を開発する意義や波及効果及びそれを実行する上での課題について明らかにすることを目的とした。

第1章では、第節において、はじめに、独自性のある保育課程編成のための4つの課題を取り上げ、独自性のある保育課程編成の編成手順と活用方法について考察した。次に、保育課程に記載されたねらい及び内容を達成するための保育内容の実践について提案した。対象保育実践は、保育課程編成上、まずは園で重視する3領域（健康・表現・環境）に関する内容とし、対象は、筆者が勤務する「御南まんまるこども園（旧御南第二保育園）」と姉妹園である「御南認定こども園（旧御南保育園）」に在籍する園児と保護者とした。そして、本論では、幼児教育・保育が遊びの中での学びが重視されてきた考え方を基本としながらも、幼児の長期的な発達を見通し、就学後もいきいきと周囲の環境に関わり、学んでいくことができるよう持続的な学びを促すことを重視し、子どもの学びに向かう力の育成に焦点を当てることを目的とした。本論で取り上げた保育内容は、健康領域では、3～5歳児クラスの水泳指導カリキュラムの開発と、親子で行う運動遊びの頻度と子どもの心身状態との関連、表現領域では、植物『藍』を用いた保育実践モデルの開発と保育材料の提案、環境領域では、藍の栽培と染色による保育実践と、科学する心を育む自然体験プログラムとし、各保育実践の意義と導入する上での手順と条件について述べた。

第2章では、独自性のある保育課程の具体的な編成手順とその活用方法、及び保育課程に基づく自己評価観点の明確化手順について考察した。1節では、実効のある保育目標と保育課程について、実効のある保育目標と、それらを達成するための理論的枠組みを設定し、それらに基づいて園の理念や地域の実態に沿った独自の保育課程を編成する手順について考察した。2節では、実効のある保育目標を、園の保護者に解説した後にアンケート調査を実施し、解説を聞く前後で、園の保育への理解深化と価値の実感、子育てへの意欲向上にどういった変化が生じたかについて検証した。3節では、園の保育者を対象に、自由記述式の質問紙調査を通して、法人設立から現在に至るまでの園史を振り返ることによって生じる意識変化を分類し、考察した。4節では、自己評価観点明確化手順を、園で重視する保育実践を対象に、保育課程の前提にある保育の理論的枠組み、指導上の留意点、保育所保育指針のねらい等の観点から案出し、対象職員に妥当性を確認した上で、必要な修正を行い、対象実践における自己評価観点として確定できることを確認した。

第3章では、保育課程に記載したねらい・内容を達成するための保育内容の実践として、5つの保育実践を提案した。1節では、3～5歳児クラスの水泳指導カリキュラムを「公認水泳コーチ」の資格を持つ保育者が園の設備を用いて「遊び」を軸に開発し、それに基づいて資格等をもたない保育者が実践後にその教育効果について考察した。2節では、家庭における親子での運動遊び頻度を調査し、それが園児の心身状態にどう影響するかについてアンケート調査から分析し、その関連について考察した。3節では、『藍』を用いて、植物繊維である綿素材を綺麗な青色に染色する方法について、2種類の実践モデルを提案した。第4節では、園で園児自らが栽培した蓼藍を用いて、染色体験を行うことを通して、植物の不思議さや美しさに触れる体験から、その教育価値について考察した。第5節では、身近な自然環境を使った3～5歳児の自然体験プログラムを開発し、1年間の様々な生き物との関わりや感動体験から、園児の科学する心の育ちとの関連について考察した。

第4章では、研究の総括と今後の課題として、第1節では、保育課程編成と園児の持続的な学びを促す保育内容の纏めについて述べた。第2節では、本論の一般性と有用性、及び波及効果の観点から、今後の研究の課題と発展の可能性について言及した。